

社会構造の変化を反映し医療・介護分野の施策立案に効果的に活用し得る
国際統計分類の開発に関する研究

研究代表者 今村 知明 奈良県立医科大学公衆衛生学講座 教授

研究分担者 小川 俊夫 国際医療福祉大学大学院 教授

研究要旨

疾病及び関連保健問題の国際統計分類 (ICD) は、現在 ICD-10 から 11 への改訂が実施されている。本研究は、ICD 改訂による影響がわが国の医療全般に関わることを念頭におき、わが国において適切な分類をとりまとめて提言することを目的とする。本研究は、ICD 改訂動向研究、ICD フィールドトライアル研究、ICF 活用研究に関する 3 つの研究班により構成され、それぞれが研究を実施した。ICD 改訂動向研究では、ICD-11 国内検討会を組織し、ICD-11 に関する各学会などの意見を幅広く収集したほか、日本語化作業のためのプラットフォームを活用した日本語化作業の支援と実施、ICF との関連などについて幅広く分析を実施した。ICD フィールドトライアル研究では、ICD フィールドトライアルを通じてその実用性について検討を実施した。ICF 活用研究では、その機能と実用化に向けた検討を実施した。ICD-11 のわが国への適用と ICF の活用について今後も引き続き検討を行う必要がある

研究代表者

今村 知明
奈良県立医科大学公衆衛生学講座
教授

<ICD改訂動向研究班>

研究分担者

田嶋 尚子
東京慈恵会医科大学
名誉教授

中谷 純
札幌国際大学
客員教授

今井 健
東京大学大学院医学系研究科
疾患生命工学センター
医工情報学部門
准教授

小川 俊夫

国際医療福祉大学大学院
医療福祉学研究科
教授

滝澤 雅美

国際医療福祉大学
医療福祉・マネジメント学科
講師

小松 雅代

奈良県立医科大学医学部看護学科
公衆衛生看護学
講師

<ICD活用研究班>

橋本 圭司

国立成育医療研究センター
臓器・運動器病態外科部
リハビリテーション科・医師

山田 深
杏林大学医学部
准教授

向野 雅彦
藤田医科大学
リハビリテーション
准教授

木下 翔司
東京慈恵会医科大学
リハビリテーション医学講座
助教

<ICD フィールドトライアル研究班>

水島 洋
国立保健医療科学院
研究情報支援研究センター
センター長

緒方 裕光
女子栄養大学
教授

星 佳芳
国立保健医療科学院
研究情報支援研究センター
主任研究官

上野 悟
国立保健医療科学院
研究情報支援研究センター
主任研究官

佐藤 洋子
防衛医科大学校
助教

A. 研究目的

疾病及び関連保健問題の国際統計分類（ICD）は、わが国では死亡統計のみならず患者調査、DPCなどの医療保険制度、診療情報管理などに広く活用されている。現在ICD-10から11への改訂がWHOによって実施されており、わが国は内科分野の議長国を務めるなど深く関与している。2018年のICD-11公表後、2019年の承認に向けて、今後も構造や内容の改訂が実施されるほか、フィールドトラ

リアルによりその実用性が検討される予定である。国際生活機能分類（ICF）は、わが国でも実用化に向けた検討が進んでいるが、ICFのさらなる活用や国際比較の実現には課題が指摘されている。さらに、WHOはICDやICFなどWHO中心分類間の連携やオントロジーの活用を検討しており、今後分類のあり方が大きく変容する可能性もある。わが国においては、ICD改訂作業に継続して関与するとともに、ICDやICFのわが国におけるさらなる活用を検討することで、わが国の医療の実態を踏まえた分類を構築し、より適切な医療情報を将来的に確保する必要がある。

本研究は、ICD改訂による影響がわが国の医療全般に関わることを念頭におき、わが国において適切な分類をとりまとめて提言することを目的とする。またICD及びICFがわが国にとってより適切な分類となるよう、WHOの検討の場で行うべき対応に資する基礎資料を作成することも目的である。3カ年計画の本研究は、全体としてはICD改訂動向研究、ICDフィールドトライアル研究、ICF活用研究に関する3つの研究班により構成される。

（1）ICD改訂動向研究班

ICD改訂動向研究班は、研究期間を通じてICD改訂の最新動向を収集・分析し、ICD-11の妥当性について検討する。また、わが国で現在利用している各種分類とICDとの違いを明らかにし、わが国におけるICDのさらなる実用化と普及について検討する。これらの収集・分析した各種情報は国内の各関連学会と共有したうえで、ICDの改訂や活用における問題点や課題を集約して改善案を検討するほか、WHO中心分類間の連携やオントロジーの活用についても意見集約を行い、提言を実施する。

研究年度を通じて、ICD-11公表に伴うWHO主催会議やWHO-FIC年次会議などへの参加等によりICD改訂動向に関する情報を収集し、さらに意見発信を行う。また本研究班

で ICD-11 の日本語化に向けた検討を目的とした検討部会を組織し、この部会を通じて日本語化の内容や方法、手順などについて検討を行い、日本語化作業のためのプラットフォームを活用した日本語化作業の支援と実施、ICF との関連などについて幅広く分析を実施する。さらに、各種分析を通じてわが国に適した疾病分類の構築と活用について考察する。

(2) ICD フィールドトライアル研究班

ICD フィールドトライアル研究班では、研究期間を通じてフィールドトライアルにより ICD-11 の妥当性について検討する。また、フィールドトライアルの結果を踏まえて、ICD の改訂や活用における問題点や課題を集約して改善案を検討する。

(3) ICF 活用研究班

ICF 活用研究班では、研究期間を通じて ICF の実用可能性の検討を実施する。特に、ICF を用いた評価法や情報共有法の開発を試みるほか、臨床現場への適用とその結果の分析を実施する。

本研究は、ICD 及び ICF がわが国にとって適切なものとなるよう広く国内関係者から意見の集約を行い、わが国に適した疾病分類と生活機能分類を取りまとめるとともに、ICD 改訂や ICF 改正への適切な対応に資することを目的とする。また、ICD-11 と ICF のわが国への適用と活用の際の判断材料となる知見の集積も目的である。

今般の ICD 改訂はわが国の医療全般に関わることから、その影響は非常に大きい。わが国の実態を踏まえた適切な医療情報を将来に渡って確保するためには、ICD 改訂に関して情報収集と分析・検討し、国内外の関係者間の調整を踏まえて意見発信を行う必要がある。また ICD-11 完成に向けて、わが国におけるフィールドトライアルを実施し、結果の意見集約と分析、WHO へのフィードバックを行

うことにより ICD-11 の妥当性を高めるのみならず、わが国の実情に沿った ICD への具体的な提案が可能になる。ICF については、わが国の医療現場における活用が求められており、特にリハビリテーション分野での ICF 活用が有効と考えられる。これらの作業は今後のわが国の疾病及び生活機能統計の改善や有効活用のための基礎資料となる点からも非常に重要である。

B. 研究方法

本研究は、(1) ICD 改訂動向、(2) ICD フィールドトライアル、(3) ICF 活用の3つの研究により構成される。

(1) ICD 改訂動向研究

1) 国内 ICD 改訂検討会の組織（平成 29～31 年度）

研究年度を通じて、以下の関係学会の代表者などから構成される国内 ICD 改訂検討会を組織し、各学会からの意見調整を図る形で意見の集約化を行いつつ、課題の整理及び改善案の提示を行った。

日本内科学会、日本消化器学会、日本呼吸器学会、日本腎臓学会、日本内分泌学会、日本血液学会、日本循環器学会、日本神経学会、日本リウマチ学会、日本医療情報学会、日本診療情報管理学会、日本小児科学会、日本糖尿病学会、日本感染症学会、日本口腔科学会、日本眼科学会、日本癌治療学会、日本外科学会、日本口腔科学会、日本産婦人科学会、日本耳鼻咽喉科学会、日本整形外科学会、日本脳神経外科学会、日本泌尿器科学会、日本皮膚科学会、日本病理学会など

2) ICD 改訂に関する分析と提言（平成 29～31 年度）

ICD 改訂ツールなどに入力された情報を整理し、ICD-11 の問題点を抽出した。その際

に、行政や学会など各関係者から広く意見集約した上で、問題点の改善案を提示した。

3) ICD 改訂に関する動向把握と意見発信（平成 29～31 年度）

WHO-FIC ネットワーク年次会議や各種 WHO 主催の会議に参加するほか、WHO や世界各国の専門家との電話会議を適宜開催し、ICD 改訂動向や ICD-11 構築についてとりまとめ、学会・国際会議などで成果の発信を行った。

4) わが国に適した ICD-11 の構築に関する検討（平成 29～31 年度）

ICD-10 などわが国で現在活用されている疾病分類を整理し、ICD-11 のわが国での実用可能性について検討した。特に、日本語化 WG を通じて ICD-11 のわが国への適用について考察を実施し、日本語化作業のためのプラットフォームを活用した日本語化作業の支援と実施、ICF との関連などについて幅広く分析を実施した。これらの分析を通じて、わが国の状況に適応した日本版 ICD-11 とするための検討を行い、基礎資料を作成した。

（2）ICD フィールドトライアル研究

1) フィールドトライアルの実施（平成 29～30 年度）

WHO のガイドラインに従い、フィールドトライアルを実施した。具体的には、基本データの収集、ブリッジコーディング、信頼性の評価を行なったほか、わが国の実情に沿って翻訳語の統一や追加的な解説を作成した。フィールドトライアルの客観性を高め、バイアスを回避するため、調査対象者の選定法や日本語翻訳の質の改善も実施した。

2) データ解析（平成 29～31 年度）

収集したフィールドトライアルのデータは、WHO のプロトコルに従った定型的分析を

実施した。さらに多変量解析による複数要因間の関係性、改訂前後のコード間の定量的関係性の統計学的推定、国際比較性の検証など、わが国独自の分析を実施した。

3) 分析結果の WHO へのフィードバック（平成 30～31 年度）

フィールドトライアルデータのうち、記述的データ及び標準的分析結果を WHO へ提出した。

4) ICD-11 の実用可能性検討および今後の課題抽出（平成 30～31 年度）

フィールドトライアルの結果を踏まえて、ICD 改訂に伴う統計データへの影響について統計学的観点から分析を実施する。また医学知識体系との一致性など ICD と科学的根拠との関係について考察したほか、ICD の利用に関する課題を抽出し、WHO や国際的なパートナーと課題を共有した。

（3）ICF 活用研究

1) ICF を用いた評価法や情報共有法の構築と情報発信（平成 29～30 年度）

ICF の基本構造である「心身機能・身体構造」「活動」「参加」に加え、「健康状態」と「環境因子」「個人因子」などについて、それぞれ具体的なチェック項目の案を作成し、ICF を用いた評価法や情報共有法の構築を試みる。最終年度の本年は、小児の活動・社会参加評価尺度（Ability for Basic Physical Activity Scale for Children ; ABPS-C）乳幼児期版の 5 歳児と 6 歳児の健常データを検証した。また、高齢者に多い大脳皮質下出血患者における生活機能評価について、ICF リハビリテーションセットの評価におけるサブカテゴリ解析を行った。また、WHODAS の利便性についても検証を試みた。開発した方法は、各種学会や WHO 会議などでの情報提供と発信を行った。

- 2) 「リハビリ実施計画書」など ICF を用いた評価法や情報共有法の試験運用（平成 29～31 年度）

国立成育医療研究センターや杏林大学病院、藤田保健衛生大学病院などの施設において、評価法や情報共有法を試験運用し、その実用可能性について分析を実施した。具体的には、ICF の分類を問題点リストとして使用するための仕組みの作成に取り組んだ。研究期間内に、ICF に基づく問題点のチェックリストの作成とそれを用いたフィールドテストの実施を実施した。

（倫理面への配慮）

研究分担者、研究協力者ともに、本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業はない。

C. 研究結果

（1） ICD 改訂動向研究

1) ICD-11 国内検討会の組織

本研究班として ICD-11 国内検討会を組織し、メールなどを通じて各学会からの意見調整を図る形で意見の集約化を行った。ICD-11 国内検討会は、平成 29 年 5 月 30 日に開催され、以下の討議を行なった。

（a） ICD 改訂に関する WHO の動向

ICD-11 への改訂は、公衆衛生分野の知見の導入を目的として、従来の疾病・統計分類だけでなく、臨床研究、電子環境での活用など幅広い活用を想定した分類を目指している。ICD-11 への改訂作業は 2007 年に開始し、2012 年にベータ版が公表され、2016 年にレビュー版公表ののち、現在は加盟国への意見募集中で、今後フィールドテストを行い、2018 年公表予定である。

ICD-11 では ICD-10 の基本的な構成を維持し、公衆衛生上まとめることが適当な病態のスペシャルグループと、その他の部位別のボディシス

テムに大別している。ICD-11 のコード数は現行の約 14,000 から約 15,000 に増加する予定である。

ICD-11 改訂作業は、改訂当初から 2017 年 10 月まで専門分野ごとの専門部会（TAG: Topical Advisory Group）を中心により実施されていたが、2017 年 10 月より医学・科学諮問委員会（MSAC）および分類・統計諮問委員会（CSAC）を中心とした新組織体制に改変され、MSAC の共同議長には元内科 TAG 議長・本研究班分担研究者の田嶋名誉教授が就任された。

（b） わが国における ICD 検討体制

わが国では、厚生労働省 ICD 室が事務局として ICD 部会と ICD 専門委員会を管轄している。ICD 部会では ICD の国内適用のための種々の審議を行い、ICD 専門委員会では WHO に対する意見の検討を行っている。また ICD 室は 8 つの組織で構成される WHO-FIC 協力センターの一員であり、WHO-FIC ネットワークへの意見集約・提出などを行っている。

ICD-11 改訂にあたり、今村班は ICD 改訂動向研究班、ICD フィールドトライアル班、ICF 活用研究班の 3 つの研究グループを運営している。そのうち ICD 改訂動向研究班において ICD-11 国内検討会を組織し、諮問委員もしくはメンバーとして具体的、専門的なご意見を集約して発信することを目的として活動する。なお、ICD 改訂動向研究班と他の 2 研究班は基本的に独立して運営されているが、必要に応じて情報交換などを実施する予定である。

（c） ICD-11 に対する日本からの意見

WHO より 2017 年 3 月時点の ICD-11 β 版に対する意見収集の依頼が来たことを受けて、関連学会に対して意見照会を行い、班会議時点までに 18 学会から意見が提出された。

提出された意見のうち、ICD-11 へ期待される点としては、電子利用や柔軟なコーディングによる多様な病態把握、新たに設けられた生活機能や伝統医学の章などが述べられていた。

各章のアップデートについては、脳卒中、認知症の分類カテゴリー変更が大きな変更点で、特に脳卒中に関しては現在議論されている循環器法案についても明らかな矛盾が発生するほか、診療報酬など様々な分野への影響があるため、正確に内容を把握し、またその影響について議論すべきとの意見が出された。このような各章の内容については、詳細な情報分類は評価するが、誤字・脱字、医学用語の不統一、地域性・人種への配慮、遺伝子診断に対応した体系の整理、多くの個別課題等の改善が望まれると述べられていた。またわが国で活用するため翻訳についての配慮とサポートに関する意見も見られた。

ICD-11 では、多様な側面を持つ疾患のためダブルペアレネティングの考え方が導入されているが、臨床的ニーズに応えるためにナショナル、またはスペシャリティ・リニアライゼーションの作成と運用に関する提案が述べられていた。

ICD-11 の国内適用に関しては ICD-11 を公衆衛生や医療システムの情報基盤として生かすために、関係者への説明やサポートが必要との意見があった。

2) ICD 改訂に関する分析と提言

平成 29 年度

ICD 改訂に関して、改訂組織の再編と ICD-11 の構造について分析を実施した。ICD-11 の改訂作業の中心であった ICD-11 改訂運営会議は平成 27 年秋に改組され、医学・科学諮問委員会 (Medical and Scientific Advisory Committee: MSAC) となり、さらに平成 30 年秋には分類・統計諮問委員会 (Classification and Statistics Advisory Committee: CSAC) がスタートし、ICD-11 のメンテナンスを両委員会の協力により実施することになる。

また新たに構築された foundation (基本的構造) の検証ならびに各方面から platform に投

稿された proposal(提案)のレビュー、ICD-11 の各疾病に付記されている description の判定等を行った他、ICD-10 から 11 の疾病コードの比較とプロポーザルの提案状況の把握を行った。さらに、ICD-11 における生活機能分類を示す V-chapter (V Supplementary section for functioning assessment) に関する分析を実施した。具体的には、ICF のコードを用いて 17 の Level Block と 47 の category から成る V-chapter の要因分析を行い、ICD と ICF の構造的な関連性と、統計データとしての基礎資料となり得るかどうかの検討を行った。

平成 30 年度

本研究班の研究分担者である国際医療福祉大学の小川が 2018 年 6 月に WHO 本部において開催された ICD-11 公表会議に出席し、公表された ICD-11 について把握するとともに、今後の作業、さらには各国適用に向けた準備動向などに関する情報収集を実施した。

また、これまでの ICD-11 構築に関する経緯と構築作業のわが国の貢献について取りまとめ、医療情報学連合大会にて企画シンポジウムを開催した。

ICD-11 構築の 2018 年 2 月時点の状況としては、2017 年 10 月に公表された ICD-11 評価版に対する意見を各国の WHO-FIC 協力センターより集約し、その意見をもとに 2018 年 3 月までを目処に修正作業を実施している。その後、3 月末に一旦作業を終了して 2018 年 6 月の公表に向けた作業に入ることとなった。なお、2018 年 6 月下旬にジュネーブで ICD-11 公表イベントが予定されており、そこで正式発表となる予定とのことである。さらに、2019 年 1 月の WHO の執行理事会 (Executive Board: EB) において議論され、2019 年 6 月の WHO 総会 (World Health Assembly) において承認される予定である。なお、2018 年 6 月の ICD-11 の公表時には、WHO 本部で半日から 2 日程度のイベントを計

画しており、幅広く参加可能とのことであった。

ICD 公表後の各国への適用については、ICD-10 の適用には 5 年以上かかった国が多かったものの、ICD-11 は電子的に提供されることもあり、数年で適用を開始する国が出てくると WHO は想定しているとのことであった。また、多言語対応についても、各国の多言語化をサポートするための枠組みを用意しており、すぐにでも ICD-11 の多言語化が可能であるとのことであった。なお、多言語化は最低でもカテゴリー名までは翻訳する必要があるものの、各項目の定義などの内容については翻訳できていなくても良いとのことであった。

ICD-11 はウェブ上で公開されることが決まっているが、同時に印刷版のニーズも少なからずあると考えられる。この印刷版については、WHO としても検討中とのことである。

令和元年度

ICD 改訂に関しては、本報告書の小松論文において、ICD-11 における生活機能分類を示す V-chapter (V Supplementary section for functioning assessment) に関する分析を実施した。具体的には、ICF の視点から V-chapter の構造に関する分析として、疾患の診断補助や日常生活動作 (ADL : activities of daily living)、健康関連 QOL (quality of life) 等の評価として使用されている評価尺度の下位尺度について ICF コーディングを行い、V 章との整合性について分析を行った。

また、本報告書の滝澤論文において、ICD-10 と ICD-11 の分類に関する比較分析を実施し、わが国における ICD-11 実用化の際に考慮すべき項目であることを確認した。

3) ICD 改訂に関する動向把握と意見発信

平成 29 年度

研究分担者の東京大学の今井と国際医療福祉大学の小川が 2018 年 2 月 13 日に WHO 本部を訪問し、Dr. Robert Jacob と Mr. Can Celik と ICD 改訂の進捗についてヒアリングを実施した。

ICD-11 構築の 2018 年 2 月時点の状況としては、2017 年 10 月に公表された ICD-11 評価版に対する意見を各国の WHO-FIC 協力センターより集約し、その意見をもとに 2018 年 3 月までを目処に修正作業を実施している。その後、3 月末に一旦作業を終了して 2018 年 6 月の公表に向けた作業に入るとのことであった。なお、2018 年 6 月下旬にジュネーブで ICD-11 公表イベントが予定されており、そこで正式発表となる予定とのことである。さらに、2019 年 1 月の WHO の執行理事会 (Executive Board: EB) において議論され、2019 年 6 月の WHO 総会 (World Health Assembly) において承認される予定である。なお、2018 年 6 月の ICD-11 の公表時には、WHO 本部で半日から 2 日程度のイベントを計画しており、幅広く参加可能とのことであった。

ICD 公表後の各国への適用については、ICD-10 の適用には 5 年以上かかった国が多かったものの、ICD-11 は電子的に提供されることもあり、数年で適用を開始する国が出てくると WHO は想定しているとのことであった。また、多言語対応についても、各国の多言語化をサポートするための枠組みを用意しており、すぐにでも ICD-11 の多言語化が可能であるとのことであった。なお、多言語化は最低でもカテゴリー名までは翻訳する必要があるものの、各項目の定義などの内容については翻訳できていなくても良いとのことであった。

ICD-11 はウェブ上で公開されることが決まっているが、同時に印刷版のニーズも少なからずあると考えられる。この印刷版については、WHO としても検討中とのことである。

平成 30 年度

本研究班の研究分担者である国際医療福祉大学の小川が 2018 年 6 月に WHO 本部において開催された ICD-11 公表会議に出席し、公表された ICD-11 について把握するとともに、今後の作業、さらには各国適用に向けた準備動向などに関する情報収集を実施した。

また、これまでの ICD-11 構築に関する経緯と構築作業のわが国の貢献について取りまとめ、医療情報学連合大会にて企画シンポジウムを開催した。

ICD-11 構築の 2018 年 2 月時点の状況としては、2017 年 10 月に公表された ICD-11 評価版に対する意見を各国の WHO-FIC 協力センターより集約し、その意見をもとに 2018 年 3 月までを目処に修正作業を実施している。その後、3 月末に一旦作業を終了して 2018 年 6 月の公表に向けた作業に入るとのことであった。なお、2018 年 6 月下旬にジュネーブで ICD-11 公表イベントが予定されており、そこで正式発表となる予定とのことである。さらに、2019 年 1 月の WHO の執行理事会

(Executive Board: EB) において議論され、2019 年 6 月の WHO 総会 (World Health Assembly) において承認される予定である。なお、2018 年 6 月の ICD-11 の公表時には、WHO 本部で半日から 2 日程度のイベントを計画しており、幅広く参加可能とのことであった。

ICD 公表後の各国への適用については、ICD-10 の適用には 5 年以上かかった国が多かったものの、ICD-11 は電子的に提供されることもあり、数年で適用を開始する国が出てくると WHO は想定しているとのことであった。また、多言語対応についても、各国の多言語化をサポートするための枠組みを用意しており、すぐにでも ICD-11 の多言語化が可能であるとのことであった。なお、多言語化は最低でもカテゴリー名までは翻訳する必要があるものの、各項目の定義などの内容につい

ては翻訳できていなくても良いとのことであった。

ICD-11 はウェブ上で公開されることが決まっているが、同時に印刷版のニーズも少なからずあると考えられる。この印刷版については、WHO としても検討中とのことである。

令和元年度

本研究班の研究分担者である国際医療福祉大学の小川及び小松が WHO-FIC ネットワーク年次会議に出席し、ICD 改訂の最新動向を把握した。ICD 改訂に関する最新動向としては、WHO の昨年の ICD-11 公表以降、WHO においては ICD-11 の実用化に向けた各種作業を実施している。また、ICD-11 の各国適用については、各国で様々に進展しており、例えばドイツでは MMS の翻訳が 2019 年中に完成する予定であり、ファウンデーション全体の翻訳も 2020 年末までに完成予定である。

4) わが国に適した ICD-11 の構築に関する検討

平成 29 年度

ICD-11 日本語版コーディングツール作成にむけて、WHO が開発している ICD-11 coding tool の現状調査、並びに同ツールへの日本語版統合の可能性、その際の運用面・技術面からの課題について資料収集と WHO でのヒアリング調査研究を行い、WHO ICD-11 coding tool の日本語版言語拡張の実現に向けた道筋と共に、今後取り組むべき技術的課題が明らかとなった。

また、部位不明コードの実態について、ICD-10 と ICD-11 の比較分析を実施し、わが国における ICD-11 実用化の際に考慮すべき項目であることを確認した。

平成 30 年度

ICD-11 日本語版コーディングツール作成にむけて、WHO が開発している ICD-11 coding tool の現状調査、並びに同ツールへの日本語版統合の可能性、その際の運用面・技術面からの課題に

ついて資料収集と WHO でのヒアリング調査研究を行った。WHO ICD-11 coding tool の日本語版言語拡張の実現に向けた道筋と共に、今後取り組むべき技術的課題が明らかとなった。また、部位不明コードの実態について、前年度に引き続き分析を実施した。

ICD-11 日本語版コーディングツール作成にむけて、英語版の ICD-11 エンティティの訳出を効率化するツールの開発並びに ICD-10、11 対応の日英索引表管理 Web プラットフォームの運用テストと課題抽出を行った。本年度研究の成果として ICD-11 coding tool の日本語版言語拡張の実現に向けた作業効率化が図られると共に、今後取り組むべき技術的課題が明らかとなった。

平成 30 年度より、ICD-11 日本語化に向けたワーキンググループ（日本語化 WG）を組織し、定期的に会議を開催して日本語化に向けた方針の検討と作業の実施を行った。日本語化 WG のメンバーは以下の通りである。また、厚労省 ICD 室にも日本語化 WG への参加を要請した。

奈良県立医科大学 今村知明
東京大学 今井 健
奈良県立医科大学 小松雅代
奈良県立医科大学 西岡祐一
国際医療福祉大学 小川俊夫
国際医療福祉大学 滝澤雅美

日本語化 WG の開催日時および開催場所は以下の通りである。

第 1 回 2018 年 3 月 28 日 13～15 時
厚生労働省
第 2 回 2018 年 4 月 26 日 15～17 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第 3 回 2018 年 5 月 30 日 15～17 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第 4 回 2018 年 7 月 4 日 13～15 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス

第 5 回 2018 年 8 月 29 日 13～15 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第 6 回 2018 年 9 月 27 日 13～15 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス
第 7 回 2018 年 11 月 5 日 15～17 時
国際医療福祉大学赤坂キャンパス

令和元年度

平成 30 年度に引き続き ICD-11 日本語化に向けた検討部会である日本語化 WG を組織し、主としてメールと電話会議を通じて ICD-11 の日本語化に向けた方針の検討と作業の実施を行った。

また、2019 年度に厚生労働省を中心として実施した ICD-11 の日本語への翻訳作業において、本研究班として担当した新規項目の翻訳と全体の取りまとめを実施したほか、厚生労働省で実施した翻訳作業のうち、2 章、4 章、20 章における翻訳作業を事例として取り上げ、ICD-10、ICD-O-3、日本医学会医学用語辞典などを用いて日本語化に向けた検討と導入に向けた課題を明らかにした。

ICD-11 日本語版コーディングツール作成にむけて、ICD-11 和訳案確定作業を効率化するためのプラットフォームの開発と実運用、並びに ICD10,11 対応の日英索引表管理 Web プラットフォームの実運用に向けた改良を行った。これにより、主要な章に対する和訳案の確定と WHO ICD-11 coding tool の日本語版言語拡張の実現に向けた作業効率化が図られた。

（2） ICD フィールドトライアル研究

ICD-11 フィールドトライアル(FT)は、ICD-11 の適用性、信頼性、有用性などを検討するため国際的に共通のプロトコルで行われた。本研究では、国外の ICD-11FT の実施状況の調査に加え、2017 年に実施された我が国における ICD-11FT の解析を行った。ICD-11FT では ICD-10 コーディングに比べて明らかに有利な結果は得られなかった。

また、ICD-11に関する情報の普及を目的とした雑誌「保健医療科学」の特集号を出版したほか、ICD 関連の情報を集約した ICD ポータルサイトの構築を試行した。

(3) ICF 活用研究

ICF 活用研究として、国際生活機能分類を用いたリハビリテーション連携に関する研究

(本報告書・橋本論文)、ICF における評価尺度としての信頼性・妥当性検証(本報告書・山田論文)、リハビリテーション連携に用いる ICF に基づく生活機能チェックリストの作成とフィールドテストの実施(本報告書・向野論文)、および、ICF カテゴリーおよび ICF コアセットの信頼性・妥当性と臨床的有用性の検討(本報告書・木下論文)を、研究年度を通じて実施した。詳細は各論文を参照されたい。

D. 考察

本研究は、ICD 改訂動向研究、ICD フィールドトライアル研究、ICF 活用研究の3つの研究班により実施した。

ICD 改訂動向研究では、ICD 改訂動向について各種の国際会議への参加などを通じて情報収集と分析を実施したほか、各学会などの意見を幅広く収集し、その結果について幅広く意見発信を行った。わが国は、従前より内科分野の議長国として ICD-11 改訂作業に深く関与しており、2017年10月に ICD-11 の維持管理のために新たに組織された医学・科学諮問委員会(MSAC)および分類・統計諮問委員会(CSAC)においても、MSAC の共同議長に元内科 TAG 議長で本研究班分担研究者の田嶋名誉教授が設立時に就任するなど、わが国は引き続き ICD-11 改訂の中心的な役割を有している。また、体制面だけではなく、プロポーザル提出数の分析より、わが国は内科分野を中心に積極的に ICD-11 の内容に対し

て意見発信してきたことが改めて明らかになった。

ICD-11 の改訂内容については、コーディングツールを含めた多言語対応や部位不明コードの分析、さらには national modification の検討などを通じてその内容について精査すると共に、わが国への適用について検討を実施した。特に本研究において、ICD-11 日本語版コーディングツール作成にむけて ICD-11 和訳案確定作業を効率化するためのプラットフォームの開発と実運用、並びに ICD10,11 対応の日英索引表管理 Web プラットフォームの実運用に向けた改良を行ったことにより、主要な章に対する和訳案の確定と WHO ICD-11 coding tool の日本語版言語拡張の実現に向けた作業効率化が図られ、ICD-11 のわが国への適用に向けて大きく貢献した。また、ICF と ICD-11 との関連に関する分析により、今後の ICD-11 および ICF の活用のあり方についても検討を実施した。

ICD-11 は2018年6月に公表され、さらに2019年5月の World Health Assembly にて承認され、その後各国への導入に向けた準備が始められているところである。わが国でも、ICD-11 導入に向けたロードマップの検討、日本語化の方法と手順の検討などを考慮しつつ、実際の作業を開始しているところである。これらの作業を実施しつつ、わが国にとって実用的でかつ国際的にも受け入れられる分類の構築を実現するために、今後も ICD-11 改訂の動向を注視し、WHO に対して提案することが重要である。

このような状況において、本研究では、研究年度を通じて、ICD-11 公表からわが国への導入に向けて様々に作業と分析、その結果の取りまとめを実施した。

ICD-11 公表に向けた分類体系の構築については、わが国の意見を取りまとめて研究成果

として発信し、また国際動向を入手して国内の関連学会などでの発表を通じて、国内の関連諸学会と共有するなどを通じて、わが国に適した ICD-11 構築に大きく貢献した。

わが国における ICD-11 の導入に向けた作業においては、本研究班として、わが国の臨床や研究で利用されている従来分類との整合性の確保や ICD-11 の日本語化など具体的な検討を開始したほか、ICD-11 日本語化作業の取りまとめ、厚労省とも連携しつつ作業用プラットフォームの整備と ICD-11 日本語版コーディングツール作成、ICD-11 日本語化作業への参加、ICD-11 における多言語対応や ICD-10 と ICD-11 の分類体系の比較分析などの様々な研究活動を通じて、その作業進展に大きく貢献した。また ICF と ICD-11 との関連分析により、今後の ICD-11 および ICF の活用のあり方についても検討を実施した。さらに、ICD フィールドトライアル研究において、ICD コーディングツールの日本語化への課題を明らかにした。

わが国では、ICD-11 の活用に向けた具体的な検討が開始されており、本研究班もそのうち ICD-11 日本語化に大きく貢献したと考えられる。また、ICD-11 の日本語化に加えて、わが国の医療分野全般で活用可能な分類にするために、わが国の臨床などで利用されている既存の疾病分類との統合についても検討が必要であり、日本語かもこのような汎用性の高い分類となるような配慮が必要である。これらの作業を実施しつつ、今後も ICD-11 改訂の動向を注視し、わが国にとって実用的でかつ国際的にも受け入れられる分類の構築を WHO に対して提案することが重要と考えられる。

ICF 活用研究では、ICF の概念に基づいて開発された尺度について評価を行い、その有用性について確認したほか、ICF に基づく生活機能チェックリストの作成とフィールドテストを行った。これらの研究を通じ、ICF のわが国における実用化の進展について考察を実施した。

E. 結論

本研究において、ICD 改訂動向について各種の国際会議への参加などを通じて情報収集と分析を実施したほか、各学会などの意見を幅広く収集し、その結果について幅広く意見発信を行ったことで、わが国に適した ICD-11 構築に大きく貢献した。また、ICD-11 の日本語化に向けた作業を実施したほか、ICD-11 と ICF との関連などについて幅広く分析を実施した。また、ICF の機能と実用化に向けた様々な分析とフィールドトライアルを実施し、その実用性について検討を実施した。本研究班は、ICD-11 および ICF の改訂・改正情報を把握し、わが国での活用に向けた議論を行うという目的を達成したと考えられる。引き続き ICD-11 のわが国への適用と ICF の活用について検討を行う必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 恩田美湖, 田嶋尚子. 1 型糖尿病の疫学これからの展望. 特集 1 型糖尿病の最前線. 内分泌・糖尿病・代謝内科 45(6)423-429.2017.
- 2) 滝澤雅美、小川俊夫、及川恵美子、新畑覚也、中山佳保里、森桂、田嶋尚子、今村知明.ICD-11 改訂作業の現状分析と構造変更に関する一考察.医療情報学.37 (Nov.) :702-706.2017
- 3) Mizushima H , Tanabe M , Sugamori Y , Sato Y , Ogata H Establishment of New National Rare Disease (Nambyo) Registry and Registry Guidelines in Japan. Stud Health Technol Inform. 2017;245:536-538. doi:10.3233/978-1-61499-830-3-536 PMID: 29295152

- 4) Tachibana T, Mizushima H. A Review for Promoting Evidence-based Healthcare and Welfare Policies for People with Disabilities. A Proposed “Definition of Health” for a Care-focused Mature Society. *J Epidemiol Public Health Rev* 2(6): doi <http://dx.doi.org/10.16966/2471-8211.158>
- 5) Tachibana T, Mizushima H. Promoting Evidence-Based Health and Welfare Policies for People with Disabilities: Proposing a “Definition of Health” for a Care-Focused Mature Society. *Epidemiology (Sunnyvale)* 2017; 7:334. doi:10.4172/2161-1165.1000334.
- 6) 水島 洋. ICTによる障害者に対する意思疎通支援の現状と課題. *保健医療科学*. 2017 ; 66(5) : 497-501.
- 7) Hashimoto K, Tamai S. Investigation of Mean Data for the Parent-Rated Ability for Basic Movement Scale for Children Type T (ABMS-CT) in Toddlerhood. *Pediatr Neonatal Nurs Open Access* 2017;3(1):doi <http://dx.doi.org/10.16966/2470-0983.120>
- 8) Kinoshita S, Abo M, Okamoto T, Kakuda W, Miyamura K, Kimura I. Responsiveness of the functioning and disability parts of the International Classification of Functioning, Disability, and Health core sets in postacute stroke patients. *Int J Rehabil Res*. 2017 Sep;40(3):246-253. doi: 10.1097/MRR.0000000000000235. PMID: 2856247
- 9) Francesca Gimigliano, Melissa Selb, Masahiko Mukaino, Cristiana Baffone, Jerome Bickenbach, Julia Engkasan Patrick, Christoph Gutenbrunner, Jianan Li, Stefano Negrini, Gerold Stucki, Mauro Zampolini, Jorge Lains (2018). Strengthening rehabilitation in health systems worldwide by implementing information on functioning in rehabilitation practice, quality management, and policy: 2018 status report. *The Journal of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine*, 1(2), 37-48.
- 10) Ryo Kawasaki, et al. and Tajima N. Associations of early-stage diabetic retinopathy in patients with type 1 and type two diabetes: Japan Diabetes Complication and its Prevention prospective study. - JDCP study 4-. (submitted) 2018
- 11) 小川俊夫、滝澤雅美、及川恵美子、中山佳保里、森 桂、田嶋尚子、今村知明. ICD-11 構築の経緯. *医療情報学* 38(Suppl.): 198-201, 2018.
- 12) 秋山純一、石川智久、富谷智明、名越澄子、三輪洋人、三浦総一郎、菅野健太郎. 消化器分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. *医療情報学* 38(Suppl.): 202-205, 2018.
- 13) 安田和基. 糖尿病分野での ICD-11 構築の経緯と今後に向けた課題. *医療情報学* 38(Suppl.): 206-207, 2018.
- 14) 星野卓之. 伝統医学分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. *医療情報学* 38(Suppl.): 208-209, 2018.
- 15) 小松雅代、高井優奈、及川恵美子、森桂、小川俊夫、城島哲子、今村知明. ICD-11 における生活機能分類の意義 -ICF と V 章の関連と統合-. *医療情報学* 38(Suppl.): 210-213, 2018.
- 16) 森 桂、及川恵美子、阿部幸喜、中山佳保里. ICD-11 の我が国への適用に向けて. *医療情報学* 38(Suppl.): 214-215, 2018.
- 17) 今井 健. ICD-11 の機能からみた我が国への適用について. *医療情報学* 38(Suppl.): 216-218, 2018.
- 18) 滝澤雅美、小川俊夫、今井 健、小松雅代、及川恵美子、阿部幸喜、中山佳保里、森桂、田嶋尚子、今村知明. 詳細不明コードから見た ICD-11 への構造変更に関する一考察. *医療情報学* 38(Suppl.):796-798, 2018.
- 19) 保健医療の情報化に関する現状と課題 水島洋 *保健医療科学* 67(2) 144-149 2018年

- 20) ICD-11 フィールドトライアルについて. 佐藤洋子、水島洋. 保健医療科学 67(5) 508-517 2018 年
- 21) ICD-11 の情報学的な意味 水島洋、佐藤洋子 保健医療科学 67(5) 518-522 2018 年
- 22) 上出杏里, 橋本圭司. 小児リハビリテーション領域における ICF の活用. 総合リハ 2018;46:37-43.
- 23) 山田深 : ICF コアセット日本語版. 総合リハ 46: 13-18, 2018
- 24) 小松雅代. 既存の評価尺度と ICF の対応. 総合リハビリテーション. 2019;47(9):919-923.
- 25) 滝澤雅美、小川俊夫、今井健・他. ICD-11 における分類体系に関する一考察. 医療情報学. 39 (Nov.) :272-275.2019
- 26) 橋本圭司. ICF の活用の実際と展望 小児分野での活用. 総合リハ 2019 ; 47 : 1027-30.
- 27) 橋本圭司, 目澤秀俊, 竹厚 誠, 玉井 智, 加藤佳子, 上久保 毅. 家族記入式乳幼児発達スケールの妥当性. 日本小児科学会誌. 20(1) 1505-1510.2019
- 28) 山田深: ICF 活用の実際と展望(第 1 回) WHO の動向. 総合リハ 47: 493-495, 2019.
- 29) 佐藤洋子, 水島洋 わが国における ICD-11 フィールドトライアル—診断用語コーディングの分野別解析—. 厚生の指標 66(8) 31-37. 2019
- 30) 水島洋 Precision Public Health の現状と展望 Precision Medicine. 2(10) 26-29 2019
- 31) R. Funahashi, M. Mukaino, Y. Otaka, Y. Senju, C. Yoneda, Y. Ozeki, Y. Shimizu, T. Koike, E. Saitoh (2020). “Feasibility of the International Classification of Functioning, Disability and Health Rehabilitation Set for inpatient rehabilitation: Selection and validity of a set of categories for inpatients in a convalescent rehabilitation ward.” Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science. 11,1-8.
- 32) M. Mukaino, B. Prodingler, S. Yamada, Y. Senju, S. Izumi, S. Sonoda, M. Selb, E. Saitoh, G. Stucki (2020). “Supporting the clinical use of the ICF in Japan – Development of the Japanese version of the simple, intuitive descriptions for the ICF Generic-30 Set, its operationalization through a rating reference guide, and interrater reliability study” BMC Health Services Research. 20(1), 66.
- 33) Mackey T., Bekki H., Matsuzaki T., Mizushima H. Examining the Potential of Blockchain Technology to Meet the Needs of 21st-Century Japanese Health Care: Viewpoint on Use Cases and Policy. Journal of Medical Internet Research 22(1)e13649.2020
2. 学会発表
- 1) Toshio Ogawa, Masami Takizawa, Emiko Oikawa, Kaori Nakayama, Kakuya Niihata, Mami Ootsubo, Kei Mori, Naoko Tajima, Tomoaki Imamura. Utilization of ICD classification in Japan: Comparative analysis between ICD and a disease classification for clinical practices. WHO Family of International Classification Network Annual Meeting 2017 (Mexico City, Mexico, 16-21 October 2017)
- 2) Chute C and Tajima N. MSAC Session, WHO-FIC Annual Network Meeting 2017. The World Trade Center Mexico City, Mexico, October 16-21, 2017.
- 3) Ogawa T, Takizawa M, Tajima N, et al. Utilization of ICD classification in Japan: Comparative analysis between ICD and a disease classification for clinical practice. WHO-FIC Annual Network Meeting 2017. The World Trade Center Mexico City, Mexico, October 16-21, 2017.
- 4) Tajima N. Clinical aspect of the WHO ICD-11. IHF Member Parallel Session, Japan Hospital Association. The 41st World Hospital Congress, Taipei, November 7-9, 2017.
- 5) 滝澤雅美、小川俊夫、及川恵美子、新畑覚也、中山佳保里、森桂、田嶋尚子、今村知

明.ICD-11 改訂作業の現状分析と構造変更に関する一考察.第 37 回医療情報学連合大会. グランキューブ大阪.大阪府.2017.11.22.

- 6) Mizushima H. "Evidence based Public Health" to "Precision Public Health" Public Health and Nutrition Congress 2017/11/13 Osaka Public Health and Nutrition Congress Abstract Book.
- 7) Hiroshi MIZUSHIMA, Yasutaka SUGAMORI, Mai Ikegawa-TANABE, Yoko SATO Standardization of Patient Registry. - Importance of Patient Registry for Evidence based Public Health. Public Health and Nutrition Congress 2017/11/14 Osaka Public Health and Nutrition Congress Abstract Book.
- 8) Tachibana T, Mizushima H. Promoting Evidence-Based Health and Welfare Policies for People with Disabilities: Proposal for the Definition of "Health" in a Matured Society. In: Proceedings of 6th International Conference on Epidemiology & Public Health; 2017 Oct 23-25; Paris, France. Epidemiology (Sunnyvale) 2017; 7 (5 Suppl):79. DOI:10.4172/2161-1165-C1-018.ISSN:2161-1165 Epidemiology (Sunnyvale). <https://www.omicsonline.org/conference-proceedings/epidemiology-2017-posters-accepted-abstracts.digital/files/assets/basic-html/page-13.html> (accessed 2017-11-28).
- 9) Mizushima H., Ogata H., Sato Y., Mori K. Field Test of ICD-11 in Japan. WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 EIC Meeting Mexico City Mexico 17/10/16-21 WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 Abstract Book.
- 10) Mizushima H., Ogata H., Sato Y., Mori K. Field Test of ICD-11 in Japan. WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 Oral Presentation Mexico City Mexico 17/10/16-21 WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 Abstract Book.
- 11) Mizushima H., Ogata H., Sato Y., Mori K. Field Test of ICD-11 in Japan. WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 EIC Meeting Mexico City Mexico 17/10/16-21 WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 Abstract Book.
- 12) Mizushima H., Tanabe-Ikegawa M., Ogata H., Sato Y., Mori K. Study on ICD code for the specified intractable disease in Japan.. WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 Poster Presentation Mexico City Mexico 17/10/16-21 WHO - FAMILY OF INTERNATIONAL CLASSIFICATIONS NETWORK ANNUAL MEETING 2017 Abstract Book.
- 13) 水島洋、長谷川英重 医療ブロックチェーンの現状 第1回医療ブロックチェーン研究会 2017.11.10 和光 医療ブロックチェーン研究会資料 P.10-57 2017
- 14) 水島 洋、佐藤洋子、小林慎治、木村円、中村治雅 疾病レジストリの標準化ガイドライン 第37回医療情報学連合大会 (大阪) 2017/11/21
- 15) 水島洋、入澤厚、五十嵐紀子、長瀬嘉秀、山本晃、奥田栄司、長谷川英重 ブロックチェーン技術を用いた医療情報の保管と流通 第37回医療情報学連合大会 (大阪) 2017/11/21
- 16) 水島洋、長谷川英重 医療ブロックチェーンの現状 第2回医療ブロックチェーン研究会 2017.11.23 大阪 第2回医療ブロックチェーン研究会資料 P.10-27 2017
- 17) 水島洋、佐藤洋子、橘とも子. 疾病レジストリの標準化とそのアウトカム指標として

- の介護障害者レジストリの必要性. 第 76 回日本公衆衛生学会総会 ; 2017 年 10 月 ; 鹿児島.
- 18) 佐藤洋子, 川尻洋美, 伊東喜司男, 坂井洋治, 照喜名通, 松繁卓哉, 湯川慶子, 北村聖, 池田佳生, 水島 洋 相談対応行動分析調査に基づく、難病相談支援ネットワークシステムの導入および利用支援の検討 第 5 回日本難病医療ネットワーク学会 (金沢) 17/09/29
 - 19) 水島 洋 菅森泰隆 佐藤洋子 疾患レジストリー構築・運用法の標準化のためのガイドライン (電子カルテデータの利活用にもむけた取り組み) 第 17 回 CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2017 (名古屋) 2017.9.3.
 - 20) 水島洋, 佐藤洋子, 橋とも子. アウトカムリサーチのための障がい者登録の必要性. 第 41 回インターネット技術第 163 委員会研究会 (ITRC meet41) ; 2017 年 5 月 ; 東京.
<https://alligator.itrc.net/meet/41-agenda/>
(accessed 2017-05-17)
 - 21) 橋本圭司. 教育講演「発達障害へのポジティブな行動支援」第 18 回日本言語聴覚学会. 松江, 2017 年 6 月 23 日.
 - 22) 橋本圭司. 教育講演「発達障害のリハビリテーション」. 第 54 回日本リハビリテーション医学会学術集会. 岡山, 2017 年 6 月 9 日.
 - 23) 3)橋本圭司. 特別講演「子どもの発達を支える高次脳機能リハビリテーション」. 第 177 回東北小児神経研究会. 仙台, 2017 年 3 月 19 日.
 - 24) 橋本圭司. パネルディスカッション「乳幼児発達スケールを用いた ICF の活用」. 第 6 回厚生労働省 ICF シンポジウム. 東京, 2017 年 3 月 18 日.
 - 25) 藤井浩優, 山田深, 松田恭平, 平野照之, 岡島康友: 日常生活動作に関する FIM 得点と ICF 評価点の互換性. 第 54 回日本リハビリテーション医学会学術集会, 岡山, 2017 年 6 月 9 日
 - 26) 山田深, 松田恭平: 脳卒中ケアユニットにおける生活機能評価. 第 7 回厚生労働省 ICF シンポジウム, 東京, 2018 年 1 月 20 日
 - 27) 木下翔司 安保雅博, 岡本隆嗣, 角田亘, 宮村紘平, 木村郁夫「回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者を対象とした ICF コアセットの反応性の検討」 第 54 回日本リハビリテーション医学会学術集会 (2017 年 6 月 8 日、岡山、一般口演)
 - 28) Masahiko Mukaino. ICF in health reporting and rehabilitation quality management. 11th ISPRM world congress, 3rd May, 2017, Buenos Aires
 - 29) Masahiko Mukaino, Shin Yamada, Eiichi Saitoh, Shigeru Sonoda, Masazumi Mizuma, Shinichi Izumi Development process of national quality management system: integrating international standards and existing practice. 11th ISPRM world congress, 3rd May, 2017, Buenos Aires
 - 30) 小川俊夫. ICD-11 構築の経緯. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
 - 31) 秋山純一. 消化器分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
 - 32) 安田和基. 糖尿病分野での ICD-11 構築の経緯と今後に向けた課題. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
 - 33) 星野卓之. 伝統医学分野での ICD-11 構築の経緯とわが国への適用に向けた課題. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
 - 34) 小松雅代. ICD-11 における生活機能分類の意義 -ICF と V 章の関連と統合-. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.

- 35) 森 桂. ICD-11 の我が国への適用に向けて. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
- 36) 今井 健. ICD-11 の機能からみた我が国への適用について. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.24.
- 37) 滝澤 雅美・他. 詳細不明コードから見た ICD-11 への構造変更に関する一考察. 第 38 回医療情報学連合大会.福岡国際会議場.福岡県福岡市. 2018.11.25.
- 38) 小松雅代・他. ICD-11 における V-chapter の構造と既存尺度との関連性 : ICF の活用と有効な国際統計としての適用. WHO-JAPAN Forum 2018. November 30, 2018.
- 39) Masayo Komatsu, et al. Structure and roles of V-chapter in ICD-11: A comparison with ICF and its application as effective in-ternational statistics¹ Structure and roles of V-chapter in ICD-11. WHO Family of International Classifications (WHO-FIC) Network Annual Meeting 2018, Seoul, Korea, October 22-27,2018.
- 40) Masayo Komatsu, Toshio Ogawa, Tatsuya Noda, Ayane Inada, Nami Kurotsuka, Misato Muta, Yuna Takai, Noriko Jojima, Tomoaki Imamura. Statistical evaluation of daily living functions associated with intractable diseases using ICF and ICD-11 Chapter V codes. WHO-FIC Network Annual Meeting 2019, Banff, Canada, October 5-11, 2019.
- 41) 小松雅代、小川俊夫、野田龍也、稲田采音、黒塚那実、牟田美里、高井優奈、城島哲子、今村知明. ICF コードと V 章コードを用いた疾患別の生活機能アセスメントと統計活用. 2020 年 第 8 回厚生労働省 ICF シンポジウム.
- 42) 滝澤雅美、小川俊夫、今井健・他. ICD-11 における分類体系に関する一考察.第 39 回医療情報学連合大会.幕張メッセ.千葉県幕張市.2019.11.22.
- 43) 橋本圭司. 教育講演「神経発達症の治療と支援の実際」. 第 3 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会. 静岡, 2019 年 11 月 17 日.
- 44) 橋本圭司. 特別講演「高次脳機能障害と発達障害」. 第 66 回日本矯正医学会総会. 東京, 2019 年 10 月 24 日.
- 45) Tamai S, Yamada S, Hashimoto K. The Promotion of corporation among pe-diatric rehabilitation experts in Japan-using Kinder Infant Development Scale (KIDS). WHO – Family of In-ternational Cassification Network Annual Meeting 2019, Banff, Canada, 2019 年 10 月.
- 46) Yu Abe, Shin Yamada, Akifumi Masuda, Teruyuki Hirano, Yoshiaki Shiokawa, Yasutomu Okajima: Changes of ICF score in patients with cerebral subcortical hemorrhage. 13 th. In-ternational Society of Physical and Rehabilitation Medicine world con-gress, Kobe, June 9th-13th, 2019
- 47) 石田 幸平, 池田 光代, 山田 深, 岡島 康友, 齊藤 邦昭, 小林 啓一, 塩川 芳昭, 永根 基雄: 脳腫瘍患者への WHODAS 導入の試み. 第 37 回日本脳腫瘍学会学術集会, 石川, 2019 年 12 月 1 日
- 48) 山田深, 石田幸平, 池田光代. 脳腫瘍患者の生活機能に対する WHODAS 2.0 を用いた評価. 第 8 回 ICF シンポジウム, 東京, 2020 年 1 月 8 日
- 49) M. Mukaino . ICF Implementation Challenges in Japan. 13th ISPRM world congress, 9th-13th June, 2019, Kobe.
- 50) M. Mukaino. ClinFIT– an emerging ISPRM clinical functioning information tool: Japanese experience”13th ISPRM world congress, 9th-13th June, 2019, Kobe.
- 51) M. Mukaino. Clinical Quality Management for Rehabilitation(CQM-R): Japanese model” 13th ISPRM world congress, 9th-13th June, 2019, Kobe.

- 52) Y. Senju, M. Mukaino, M. Ozeki, Y. Okochi, K. Mizutani, M. Watanabe, E. Saitoh, S. Sonoda. "Examination of inter-rater reliability between patients and health professionals in the evaluation of body function categories of ICF Rehabilitation Set." 13th ISPRM world congress, 9th-13th June, 2019, Kobe.
- 53) R. Funahashi, M. Mukaino, Y. Otaka, Y. Senju, Y. Okochi, K. Mizutani, E. Saitoh. "A preliminary survey with the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) Rehabilitation Set in patients admitted to convalescent rehabilitation wards." 13th ISPRM world congress, 9th-13th June, 2019, Kobe.
- 54) Masahiko Mukaino, Shin Yamada, Eiichi Saitoh, Shigeru Sonoda, Masazumi Mizuma, Shinichi Izumi. Developing a scoring system for ICF clinical tool: Japanese experience. 12nd ISPRM world congress, 12th July, 2018, Paris
- 55) Shoji Kinoshita, Masahiro Abo. Effect of Interdisciplinary Rehabilitation Approach with Serial Assessment of ICF Core Set in a Convalescent Rehabilitation Ward. 13th ISPRM World Congress, Kobe, Japan, 11th Jun 2019.
- 56) 木下翔司, 安保雅博. ICF rehabilitation set を利用した多職種リハビリテーション治療の回復期リハビリテーション病棟における有効性. 第8回 ICF シンポジウム、東京. 2020年1月18日.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

<参考資料>

WHO-FIC ネットワーク会議 2017年10月16～20日(於メキシコ・メキシコシティ)

国際医療福祉大学大学院
小川俊夫

10/16 8:30 – 9:30 WHO-FIC Council 1

- WHOでは、引き続きSDGとUHCに取り組んでいるほか、昨年度WHO-FIC会議からの大きな変更点としては、新しいDGが選ばれたことであり、現在新しい体制で運営が開始されている。また、当該部署では新しいADG (Al Ansary)が任命されたほか、新しいDirectorとしてGates foundationからJohn Groveが異動した。
- WHO-FIC Networkも拡大を続けており、中国のNHDやモンペリエ大学などが新たに加入した。
- WHO-FIC Familyにおいては、新たなfamilyを規定するものとしてfamily paperが作成され、またfamily間のマッピングシステムも構築されつつある。
- ICDに関しては、2018年6月のimplementationに向けて、引き続き作業を実施しており、様々なインプットがなされている。またクラウドへの移行も開始しており、より利便性の高いものになる予定である。さらに、ICDのための新たなurl “icd.who.int”が取得された。
- ICFに関してはICF2017が完成し、オンライン版はブラウザにアップロードされている。またICFのEducation platform、practical manualは最終校正の段階であるほか、ICD-11にfunctioningの章が作成された。
- ICHIはベータ版とICHIブラウザが本会議にて発表される予定である。
- WHO-FIC networkにおいては、URCがCSACとなるなどの変更があった。

10/16 10:00 – 10:30 WHO-FIC Council 2

各コミッティのco-chairから活動報告があった。

1) EIC

- Key achievement: 今年は2回の電話会議と南アフリカでのF2F会議を実施した。主な活動は、ICD-11フィールドテスト、ICF e-learning toolの開発、WHO-FIC Implementation databaseの構築を実施
- Outstanding issues: WHO-FICの各分類の実用化、ガイドライン開発、より積極的な参加など

2) FDC

- Key achievement: Family paperの改訂、ICHIベータ版の発表
- Outstanding issues: Family paperの改訂、ICFへの個人的要因の分類への反映、UHC・SDGsへの貢献、WHO-FIC関連分類の共同使用
- Mid-year meeting: FDRGと同時開催

3) ITC

- Key achievement: WHO-FIC platformの改訂、coding tool、ICHI Platformの開発、ICD Fitの作成、URI API、OMICS、CLaML、iCOSの開発
- Outstanding issues: 特になし
- Mid-year meeting: 特になし

4) URC

- Key achievement: 昨年から ICD-10 は 104、ICF は 20 の recommendation を実施した。ClaML へ参加した。
- Outstanding issues: ICD-10 update の終了と ICD-11 への移行プロセス、ICF update platform の構築、ICF update の定期的な実施、URC から CSAC への移行

5) MRG

- Key achievement: URC へ 29 の recommendation 実施、ICD-11 のレビュー、フィールドテストへの協力
- Outstanding issues: mid-year meeting で議論された論点があるまま残っている
- Mid-year meeting: US

6) MbRG

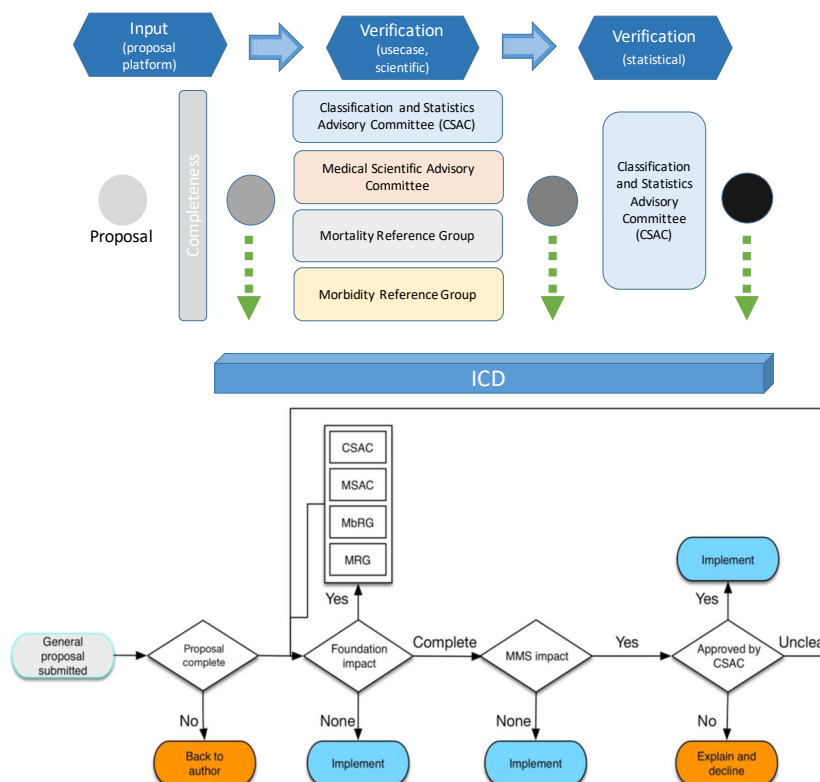
- Key achievement: 2016 年の東京会議で再始動し、3 月 19～21 日にスウェーデンで会議を開催し、今後の活動について議論。ICD-11 24 章 factors の構築への貢献
- Ongoing work: reference guide, training material, morbidity rule testing, primary care

7) FDRG

- Key achievement: ICF2017 が完成し、ブラウザにアップロード。ICF learning tool および ICF e-learning tool の構築、mICF の開発、ICF practical manual v0.9 の最終校正
- Outstanding issues: ICF2017 PDF version、WHODAS2.0 の利用調査、WHODAS training material、ICF オントロジーの改良、UHC への貢献に関する paper の執筆、ICF と ICD-11 の共有
- Mid-year meeting: 2017 年 6 月に南アフリカで開催

10/16 11:00 – 12:30 ICD-11 Training

- ICD-10 は 100 カ国以上で使用され、43 言語に翻訳されているが、開発から 27 年経っており、また ICD が様々な目的で利用されるようになったため、ICD-11 の開発を開始した。
- ICD-11 改訂には、科学的・臨床的なインプットを実現しており、300 人以上の臨床の専門家が 30 の TAG を組織し、ICD-10 からの構造変更を実施
- ICD-11 改訂のタイムラインは、2017 年に quality assurance を実施し、2018 年にリリース版の発表と使用開始
- ファウンデーションの整備、コンテンツモデルの構築、マルチプルペアレンティングの実現
- IT friendly
 - Web での提供とオンラインおよびオフラインでの利用の実現
 - Web からのアウトプット (CSV あるいは ClaML など各種フォーマットのチョイス)
 - 印刷版の提供
- User friendly
 - Coding tool
 - ICD-11 browser (多言語対応)
 - Proposal and commenting tool
 - Review tool
 - Implementation assessment tool (多言語対応)
 - Translation tool
 - Mapping tool (ICD-10 からあるいはへのマッピング)
- Implementation friendly
 - Training materials
 - Mapping from and to ICD-10
 - Training and testing platform
 - Translation tool, etc
- プロポーザルとレビュー
 - WHO に届いたプロポーザルは、WHO により内容のチェックを受けたのちに、CSAC、MSAC、MRG、MbRG のいずれかによりレビューされ、さらに必要に応じて CSAC によるレビューを受けて、ICD への修正の有無が決定される



- CSAC の組織
 - Countries (各国の CC)
 - MSAC
 - MRG
 - MbRG
- ICD-11
 - 26 章から構成、新たに追加されたのは 5 章と 2 セクション
 - Chapter 3 Diseases of the Blood or Blood-forming Organs
 - Chapter 4 Disorders of the Immune System
 - Chapter 7 Sleep-Wake Disorders
 - Chapter 17 Conditions related to Sexual Health
 - Chapter 26 Traditional Medicine
 - Section on functioning (activity and participation – WHODAS2/MDS)
 - Chapter X Extension codes
 - extension code
 - type 1: severity, aetiology, external causes など
 - type 2: main condition, present on admission

10/17 9:00 – 1100 ITC

- ITC のセッションでは SNOMED CT、ClAML、Iris、ICD-11 tooling update、ICD-FiT について発表があった。うち、SNOMED CT について以下にまとめる。
- ISHTO は、ICD-11 4 月バージョンを用いて、ICD と SNOMED との統合についてマッピング作業を実施した。この作業は、1st phase としてマッピングの構築と、2nd phase としてのマッピングの完成の 2 段階で実施されており、1st phase は 2017 年 12 月に完了予定である。
- このマッピング作業に伴い、トレーニングの実施や様々なツールの開発も実施する予定であり、さらにパイロット版のマッピングの評価も実施し、長期的視野にたった計画を立案する予定である。
- このマッピングはオントロジーを用いたものではなく、traditional mapping を用いている。オントロジーの活用は引き続き検討しているが、同時に traditional mapping を評価した上で、オントロジーの活用について検討したい。

10/17 11:00 – 1300 MRG

- ICD のアップデートについて発表があり、ICD-11 は 5 年前後に 1 回大規模なアップデートを実施し、細かいアップデートは毎年実施する。
- ICD 改訂に関する組織としては、URC が CSAC になることが決定し、2018 年 6 月の ICD-11 発表に向けて、2 月末までにプロポーザルを集約する予定である。

10/19 CSAC

- 1999 より活動してきた URC は 2017 年より CSAC として活動することになった。CSAC の役割は、WHO に対して戦略的あるいは技術的なアドバイスを行うことであり、また ICD の構造および内容について決定する役割も有しているほか、WHO-FIC 分類についても同様の役割を有している。
- CSAC の業務内容は、URC と同様に ICD に対するプロポーザルを受理し、レビュープロセスを経て CSAC がプロポーザルの可否を決定する。また、疾病の定義の入力や管理も CSAC の役割である。ただし、ICF について ICD と同様にレビュープロセスを用いたメンテナンスを実施するかどうかは未定。
- CSAC のメンバーは正式には決まっておらず、URC の議長などの選挙が 2018 年に行われる予定で、事務局なども同時に任命される予定であり、1 年以内に正式なメンバーが決定する
- 今後の課題は公衆衛生上の問題を考慮した分類を構築することであり、各国の CC や疫学・統計の専門家の意見を取り込んだ分類の構築を目指したい

10/19 MSAC

- MSAC 主要メンバーと TOR の説明の後にレビュープロセスにおける MSAC の役割について説明があった。レビューの際にはプロポーザルは WHO で専門家による検討が必要と判断されたものはまず MSAC に送られて検討されたうえで、プロポーザルごとに MSAC としての解決方法（リコメンデーション）が提出され、CSAC において決定される。
- ICD-11 のリニアライゼーションは、ICD-11-MMS の他にも作成される予定である
- 今後の作業としては、ICD-11 完成に向けて 2018 年 3 月までに定義の作成と修正が実施される予定である。なお、どの程度の作業が必要かは、例えば伝統医学は完了しているなど章によって異なるため、確認が必要である。定義は国際的に認められたものである必要がある。
- 正式発表版の ICD-11 の構造に関する修正は 2017 年 9 月で締め切っており、構造に関する修正はこの後はレビュープロセスで対応する。
- 2018 年 4 月からは通常のレビュープロセスが稼働する予定である。
- MSAC のメンバーはレビュー内容に従って専門家をレビューアとして任命することが可能であり、そのためレビューの担当者は、WHO に寄せられるレビューの数と内容により分野により異なると考えられる。

10/20 WHO-FIC Plenary: ICHI

- ICHI は 2007 年から開発を開始し、2017 年に評価のためのベータ版が正式に発表された。
- ICHI には医療ケアのみならず、公衆衛生や伝統医学など幅広い分野がカバーされている。
- 既存の医療行為分類から ICHI への転換を促進
- 中国 NHDRC からの資金提供
- ベータ版
 - ICD-11 と同様にエクステンションコードが多く開発され、構造として ICD と類似。
 - 7000 以上のコード
 - ICHI ブラウザの開発
 - ICHI トレーニングマニュアルの作成と 2018 年にフィールドトライアル実施予定
 - ICHI の多言語化の試み

10/20 JTF

(1) ICD-11 timeline and future

- フェーズ 1 (2007 – 2015)
 - 計画立案、TAG/WG の構成
 - システム構築の準備
 - コンテントと構造の修正と作成
- フェーズ 2 (2015 – 2018)
 - ICD-11 の完成
 - JTF の組織と TAG の解散
 - ユーザガイドやレファレンスマニュアルの作成
 - ICD-11 各国適用の準備
 - メンテナンスに関するガバナンス決定
- フェーズ 3
 - 2018 年 6 月にリリース版の作成
 - MSAC、CSAC の組織
 - ICD-10 メンテナンスの終了
 - ICD-11 の最初のアップデートは 3 年後を予定
- フェーズ 4
 - 2021 年から定期的なアップデートの実施

(2) JTF Progress report

- 2014 年に ICD-11 改訂のレビューを実施してレポートを作成
- 2014 年レポートをもとに ICD-11-MMS を構築
- 2015 年より JTF が本格稼働し、25 人前後の専門家が集まって対面会議を複数回実施
- ICD に関する WHO へのアドバイスの実施と ICD-11-MMS の問題点の解決と改良を実施
- 2018 年 10 月に解散の予定
- これまでの議論の経緯
 - 2015 年
 - レファレンスガイドの作成
 - 感染症、糖尿病、伝統医学、プライマリケアに関する議論の実施
 - post-coordination に関する議論
 - コード体系に関する議論 (長いコードの排除)
 - プロジェクト計画の立案
 - 2016 年 1 月
 - ICD-11 に関する主要な提案の実施
 - コンテントに関する方針の決定
 - 2016 年 4 月
 - スケジュールに関する議論
 - コンテントの確認
 - ICD-11 JLMMS から ICD-11-MMS への名称の変更
 - エクステンションコードに関する議論
 - クラスターコーディングの議論
 - 2016 年 7 月
 - コンテントの議論
 - 身体機能 (functions) の導入
 - 2017 年 1 月
 - コンテントの議論
 - ICD-11 のアップデートとメンテナンスのタイミングに関する議論
 - Extension code の章に関する議論
 - 2017 年 7 月
 - 2018 年リソース版の内容に関する議論
 - 加盟国からのフィードバックの議論
 - クラスターコーディングに関する議論

- ガバナンスに関する議論
- 今後の作業
 - automated mortality coding tool の開発
 - ICD-11 の各国導入に関する議論（導入に3～5年かかると予想）
 - ICD-11 の普及への活動

以上

ICD-11 Release Event 出張報告

日時：2018年6月18日（月）12:00 – 14:00pm
会場：Salle D WHO HQ main building 7F

国際医療福祉大学
小川俊夫

2018年6月18日に ICD-11 Release Event が WHO 本部で開催された。以下はその報告である。なお、この ICD-11 Release Event は WHO 本部 7 階の会議室で開催され、出席者の多くが WHO 本部職員であったが、WHO 地域事務局とビデオ回線経由での報告がなされた。

1. 開会

Dr. John Grove (Director, Information, Evidence and Research Cluster, WHO) による開会の挨拶に続き、Dr. Tedros Ghebreyesus (Director General, WHO) のビデオ挨拶および日本病院会の末永副理事長の挨拶があった。Dr. Grove から、この ICD 改訂は 11 年かかり 280 近くの専門機関と数百人以上の専門家が関与したという点で、WHO の中でも類を見ない大規模な事業との説明があった。また、日本病院会からの長期間の資金提供に対して WHO からの感謝の意が表された。末永副理事長からは、日本病院会が組織としてこの事業に関与したことの説明があり、また ICD-11 公表にお祝いの言葉を述べられた。

2. ICD-11 の新しい機能

ICD-11 の機能について、Professor Chris Chute (Johns Hopkins University) から説明があった。ICD は従来より主として死亡統計と罹患統計で利用されていたが、ICD-11 でもこれらが引き続き利用可能なことに加え、臨床面では医療の質向上や治療マネジメント、健康状態の向上などへの活用が期待されており、さらに医療費の審査支払などへの活用も期待されている。また、これまでよりも幅広い活用として、アウトカム研究などへの活用可能性についても言及された。

ICD-11 の新たな機能としては、Post-coordination の概念を導入して疾病分類を組み合わせることを可能にしたことで、分類の幅が大幅に広がったことが挙げられた。また、この機能に伴い章立ての構成が変わったことや、痛みや身体機能などの新たな情報の付加が簡易に可能となった点も指摘された。さらに、全ての情報は Foundation に保存されており、ICD-11-MMS は死亡統計および罹患統計のために Foundation からリニアライゼーションで抽出されたもので、今後必要に応じて新たな分類を Foundation から抽出することが可能であるとの説明がなされた。

上記の機能は ICD-11 が電子的に構築されたことにより実現されたものであり、Ontology の概念を用いた構築と運用を実現したとの説明があった。さらに、ウェブでの公開により常に最新の ICD へのアクセスが可能であることと、ICD Coding Tool により疾病の検索とコーディングがより容易になったことも指摘された。また、Application Programme Interface (API) の活用が可能になったことで、ICD-11 を用いた様々なアプリケーションの開発などが期待され、ICD の利用可能性が大きく向上したことが述べられた。

3. ICD-11 の新たな運用と分類

ICD-11 の新たな運用と分類について Dr. Robert Jacob (WHO) から説明があった。ICD-11 が電子化されたことにより、その運用が大きく変化した。例えば、Foundation を電子的に管理することや分類やルールなどの公表、メンテナンスが全てオンラインで行われるようになり、またアップデートのタイミングや内容が電子化により迅速になるなどの改善された点が報告された。

ICD-11 の分類についても、ICD-10 から大きく変化した部分について説明があった。例えば、新生物の内容ががん登録に適したものに変更になったほか、AMR (antimicrobial resistance) やゲーム依存症 (Gaming Disorder) などが新規に追加された。また、糖尿病は臨床で使いやすい分類として変更された。章立てでも変更となり、伝統医学や身体機能などを含む 6 つの章が新たに追加された。

Dr. Jacob の説明に続いて、ICD-11 改訂作業について WHO が直接関与した母子保健（Maternal and Sexual Health）と精神医学（Mental Health）分野における改訂作業について報告があった。特に、精神医学分野で新たに追加された Gaming Disorder が世界的に注目されている点などが説明された。

4. ICD-11 の各国適用

WHO の Dr. Nenad Kostanjsek より、ICD-11 の Implementation package について説明があった。ICD-11 の加盟各国への適用に向けて、ICD-11 にはその円滑な適用を目的とした様々な機能が付加されたとの説明があった。第一に、ICD Coding Tool、ブラウザ、ICD-11 APIs、翻訳ツールなどの 4 つの新たな機能が実装されたことである。第二に、各国への適用の際に用いられる Transition Guidance が用意され、その内容としては ICD-10 から ICD-11 への transition table、transition guide and advocacy materials、さらに他の分類とのマッピングツールなどである。第三に、ICD-11 適用のための様々な教育を行うことであり、その一環としてコーディングの教育と自己評価が可能な ICDfit も開発された。

ICD-11 の各国への適用については、タイの WHO-FIC 協力センターから報告があったほか、WHO の各地域事務局からも地域での ICD-11 への適用と期待について報告があった。

5. その他

最後に質疑応答セッションがあり、Gaming Disorder の追加や ICHI との連携、医療機器と分類の関係などについて質問があった。質疑応答セッション後に Dr. Soumya Swaminathan (Deputy Director General for Programmes, WHO) より終了の挨拶があり、Dr. Grove により会議終了のアナウンスがあった。

なお、会議終了後に WHO の Dr. Robert Jacob と会談し、12 月 10 日よりベトナムでワークショップが企画されており、その前後での日本訪問は必要に応じて可能とのことであった。仮に Dr. Jacob を日本に招聘する場合は、追ってメールで調整することを確認した。

以上

<参考資料>

WHO-FIC ネットワーク会議 2018（韓国・ソウル） 2018年10月22日（月）9:30～ Council のまとめ

国際医療福祉大学
小川俊夫

1. WHO・Robert Jacob によるプレゼン

今年は Alta Ata 宣言から 40 年の節目の年である。この 40 年間で世界各国では死亡情報の整備が進んでいるものの、まだ十分とは言えないのが現状である。また、医療情報が様々に利用されるようになってきていることから、医療情報の統合とそのより一層の活用が重要と考えられる。

<WHO-FIC ネットワーク>

WHO-FIC 2018 には、54 カ国から 240 人が参加している。昨年度からの WHO-FIC ネットワークの動向については、ベネズエラ WHO-FIC 協力センターが閉鎖になった一方で、中国、ブラジル、スペイン、ロシアが加入準備中である。

<ICD>

ICD-10 の最後のアップデートを 2019 年に予定している。ICD-11 は 2018 年 6 月に公表され、実用化に向けて準備中である。今後 ICD-11 は 2019 年 1 月の EB を経て 2019 年 5 月の WHA にて承認される予定である。なお、ICD-11 の index term は 102,000 項目になると予想される。

ICD-11 の TM 章として漢方がまずは掲載されたが、他の伝統医学での疾病分類についても、近い将来導入される予定である。

<ICF>

ICF は普及に向けた各種作業が行われている。また ICF update が公表され、ICD-11 に V 章として導入された。さらに、WHODAS for children の開発が行われているほか、ICF のファウンデーションの開発とデジタル化に取り組んでいる。なお、ICF の名称については、ICD のような数字を用いた名称にはならない予定である。

<ICHI>

ICHI はベータ 2 版が公開され、フィールドテストの準備を行っている段階で、実用化に向けた最終段階である。

2. WHO-FIC ネットワーク内の各委員会の活動

(1) FDC

これまでの成果としては、WHO-FIC Family Paper の執筆を進めており、最終ドラフトが完成した。ICHI については、2018 年 5～6 月にアルファテストを実施したほか、ICHI-FiT tool の開発を進めており、2019 年度にはベータテストを実施する予定である。ICHI ベータ 2 版も完成に近づいており、2018 年 10 月に発表予定である。現在取り組んでいる課題としては、UHC の把握のための指標づくりや ICD-11 のプライマリケア版の作成、さらに ITC と共同で実施中のマッピングプロジェクトなどである。

(2) EIC

これまでの成果としては、WHO-FIC Implementation database の構築を進めているほか、ICD-11 と ICF の e-learning tool の開発を進めたことである。現在取り組んでいる課題としては、データベースの内容の充実と、ICD-11 および ICF のトレーニングの実施である。

(3) ITC

これまでの成果としては、white paper のドラフト版を執筆したことと、ICD-API の開発である。また ICD ブラウザや ICD Coding Tool などの開発を実施したほか、プロポーザルシステムのアップデートを実施した。現在取り組んでいる課題は、特になしであった。

(4) MSAC

これまでの成果としては、約 5,000 件の疾病定義をレビューしたほか、例えば副腎皮質刺激ホルモン単独欠損症 (ACTH Deficiency) など 24 件の主要な医学的な課題について議論を行った。現在取り組んでいる課題は、CSAC との業務の分担についての検討であった。

(5) CSAC

これまでの成果としては、ICD-10 については 88 件、ICF は 24 件の recommendation を取りまとめたほか、ICD-11 のプロポーザルについては多数検討を実施した。ICF については 41 件の新たなプロポーザルを受理したほか、既存のプロポーザルを含めて 47 件については決議を行った。また ICF の updating プラットフォームを用いることで、より効率的な更新が可能となった。現在取り組んでいる課題は主に ICD についてであり、ICD の更新システムと手順についてさらなる作業を実施する予定である。また、CSAC、MSAC、MRG、MbRG などとの協力体制についても検討が必要であり、さらに今後 ICD-11 のプロポーザルがかなりの量になると予想されるため、その処理について検討が必要である。

(6) MRG

これまでの成果としては、mid-year meeting を実施したことであり、現在取り組んでいる課題としては、ICD-11 の死亡ルールのレビューである。

(7) MbRG

これまでの成果としては、mid-year meeting をカナダ・バンフで実施したことであり、現在取り組んでいる課題としては、コーディングルールの構築を行っていることである。

(8) FDRG

これまでの成果としては、ICF update の構築や教育の実施、ICD-11 のリファレンスガイドの構築などであり、また mid-year meeting をドイツ・ハンブルグで実施した。現在取り組んでいる課題としては、ICF Practical Manual のアップデート、ICD 2017 年版、WHODAS Children version、WHODAS training manual、ICF education、ICF Ontology などである。

3. ICHI に関するプレゼン (Richard Madden)

診療行為に関する分類は、1978 年に発表された International Classification of Procedure in Medicine が最初と言われているが、この分類は外科的な項目が中心であった。これに対して幅広い診療行為の分類を構築するために ICHI のプロジェクトが 2007 年よりスタートした。2018 年時点でベータ 2 版が完成しテストを実施している。

ICHI beta2 版の特徴としては、まずかなり安定した分類となったこと、7,000 項目の診療行為があること、ICHI プラットフォーム上で稼働することなどであり、また ICD-11 のエクステンションコードのような組み合わせが可能となっており、ICHI Extension codes と呼ばれている。ICHI education も実現に向けた準備を実施している。またフィールドテストを実施しており、昨年度の WHO-FIC メキシコ会議以降、25 件のフィールドテストを実施しており、リハビリとの共同作業も進行している

(Rehab2030)。

今後の予定としては、2019 年に ICHI Potential Version が発表される予定であるほか、WHO-FIC ネットワークにおいて、Health Intervention Reference Group の組織に向けて提案を実施している。また、ICHI と ICD の共通のファウンデーション構築についても検討している。

4. プライマリヘルスケアに関して (FDC)

プライマリヘルスケア (PHC) の普及は WHO の work plan に明記されており、WHO-FIC ネットワークとして実現可能な貢献について議論すべきである。例えば、PHC のための ICD や ICF のスペシャリティ・リニアライゼーションなどについて検討すべきである。そのため、FDC の中に PHC Task group を設置し、検討することになった。

以上

<参考資料>

WHO-FIC ネットワーク会議
2019年10月7～11日(於カナダ・Banff)
国際医療福祉大学大学院
小川俊夫

2019年10月7日(月) FDRG

小児向けの WHODAS として開発中の WHO KIDDAS に関する報告があった。KIDDAS はその開発を 3 年計画で実施中であり、そのための予算を確保済みである。また、引き続き追加予算の募集も行っている。

WHO KIDDAS の開発の一環として、WHO や UNICEF の文書を中心とした literature review を実施した。また、既存分類の WHODAS や ICD-10 及び ICD-11 における小児向けの機能分類の現状について分析を実施した。その結果として、子供に関する身体機能については既存分類では十分に議論されておらず、子供向けの WHODAS、すなわち KIDDAS の構築が必要と結論付けた。

今後 KIDDAS 開発に向けた作業を開始し、ある程度の分類ができた段階でパイロットテストを実施する予定である。なお KIDDAS の対象年齢は 0～14 歳とする。また KIDDAS 開発に関して、アセスメントのための instruments が多すぎるので、KIDDAS の実施には慎重にすべきとの意見もある点は留意が必要である。また、WHO としては KIDDAS は ICF に完全に準拠していることと、子供の身体機能への新たな付加的な instrument として有効と考えているが、KIDDAS 及び WHODAS には environment のインパクトについては考慮されておらず、今後検討する必要がある点も留意が必要である。

2019年10月8日(火)9:00～11:00 FDC-ICHI

ICHI の開発に関して、報告があった。現行の ICHI v2 のアップデートが行われたほか、フィールドテストを実施し、ICHI 分類の問題について議論を行っているとのことである。フィールドテストについては、WHO の Nenad から報告があった。フィールドテストは 17 カ国で実施され、Line coding, case coding に関する検討に加え、分類及び内容のカバレッジについても検討された。

フィールドテストの結果としては、公衆衛生領域のステムコードでスコアが悪い傾向が見られ、またフィールドテストに参加した国でもスコアの違いが見られた。さらに outlier も各領域において見られ、今後改善が必要であることが判明したほか、英語が母国語ではない場合に問題が多いことも明らかになった。国別では、日本で実施されたフィールドテストの件数の多さが称賛された。

続いて、わが国、南アフリカ、韓国、チェコ、オランダ、カナダ、フランスなど国別のフィールドテストに関する発表があった。わが国からは、フィールドテストの経験として教育期間の短さが問題であり、正確なコーディングができなかった原因の一つと報告された。また、カナダとフランスからは公衆衛生領域のスコアが低い点について、公衆衛生の専門家の参加により改善できるとのコメントがあったほか、フランスからは extension coding が難しかったとの意見もあった。一方で、議長からは functioning intervention のコードが非常によく対応できていたことが、逆に驚きだったとのコメントもあった。

今後の ICHI 開発に関して、WHO の Nenad より報告があった。ICHI のフィールドテストの結果の分析については引き続き実施し、その結果を踏まえて ICHI β3 を作成する予定である。さらに、フィールドテストを 2020 年初頭まで延長して実施し、さらなる結果を得る予定である。

今後の ICHI の承認に向けて、本年 12 月に AMRO において Regional Conference を実施する予定であるほか、各国政府や専門家とのコンセンサスを得る予定であると発表されたが、会場からは時期尚早との意見もあった。いずれにせよ、2020 年末までに ICHI を最終的なプロダクトとして WHO に提出する予定とのことであったが、2021 年の WHA に計るのはまだ早いとの意見もあり、今後の検討課題とのことであった。また、World Nursing Association から公衆衛生領域の今後の開発についての質問があり、オーストラリアで担当していた PhD の学生がプロジェクトから抜けたため、現時点では不透明との回答であった。

さらに質疑応答では、Functioning のコーディングが難しいとの意見や、ICHI β3 を最終版として WHO に提出するのはまだ早いとの意見が複数出た。また、今後の作業には Task force だけでは人員が

少ないので、各国の WHO-FIC 協力センターの協力が必須であるほか、ICHI 完成に向けた実現可能なスケジュールを検討する必要があるとの意見がでた。また、MbRG が ICHI の gap analysis を実施する予定とのアナウンスもあった。

2019 年 10 月 8 日(火)11:30~13:00 FDC

(1)ICD-11 and ICF entities

ICF タイトルと ICD シノニムを比較すると、121 項目で同じものが見られた。うち 12 項目は ICD では signs and symptoms で ICF では body function であった。このような分析を踏まえて、今後 ICD と ICF から同じ要素を抜き出して確認し、システム化する予定である。その際に、ICD と ICF で shoreline がかなり異なる可能性があることを留意しつつ、ICD と ICF の entity が全く同じ意味がどうかを確認する予定とのことである。また ICD と ICF の重複については、該当項目数が予想よりも少ないことから、該当項目が網羅できているかどうか、再度見直す必要がある。なお、この作業には ITC も参加する予定である。

(2)コンテンツモデルの統合に関する考察(Stanford, サムソン)

ICD、ICF、ICHI のコンテンツモデルを統合し、一つのファウンデーションとすることを提案するという発表であった。この様な統合したファウンデーションを構築することで、この新たなファウンデーションから全ての分類を作成できるようになると想定しているが、そのためにはファウンデーションの構造を変更することが必要とのことであった。

これに対して、このモデルはこれまでの流れを十分に理解しているとは思えず、コンセプトを理解できないとの意見が出されたほか、議論としては面白いが様々な点で考慮が必要、あくまで研究であり現実的ではないとの意見も出された。WHO としては、コンテンツモデルは個々に構築されており、遠い将来にこのような考え方もできると思うが、現時点ではファウンデーションを統合する予定はないとのコメントであった。

2019 年 10 月 9 日(水)9:30~11:00 FDC

(1)WONCA International

ICPC-2 の改訂と ICPC-3 に関する報告があった。ICPC はプライマリケア、GP および first contact care に使う分類であり、プライマリケアの分類として住民の健康の向上、疫学の国際比較などで活用が期待されるとのことであった。ICPC-2 には現在 710 分類が存在している。その内訳は 242 症状、365 疾病、その他となっており、機能に関する章も存在する。ICPC の活用に向けて、ICD や ICF, ICHI などと連携する必要がある、また SNOMED などとのリンケージも実現する予定とのことであった。

現在、WICC Taskforce group により ICPC-3 の構築が行われており、ICPC-2 と同様のコンテンツモデルを用いて構築されている。また、ICD や SNOMED との reference も構築されている。現在、ICPC-3 のコンテンツについては議論が進んでおり、機能に関する章が追加されるなど、その拡張が実施されている。また ICPC の web ブラウザも構築が進んでいる。

2019 年末には ICPC-3 のテストが予定されている。ICPC-3 は ICD-11 の構築に貢献することが期待されており、ICD-11 for Primary Care の向上に寄与すると期待される。

(2)Primary care linearization (poster 601)

Primary health care linearization の Task group による報告があった。ICD-11 を用いて、primary health care の linearization を構築する予定であり、さらに ICD, ICF, ICHI, ICPC を統合できるような分類を構築したいと述べていた。

(3)UHC(Universal Health Coverage)

UHC の実現に向けて、UHC の各アイテムについて、ICD, ICF, ICHI などのコードを適用することを計画しており、そのための分析を実施しているとのことであった。例えば、Neonatal mortality rate の把握には、ICD や ICF のコードを適用し、Excluding breast feeding rate 0-5 months of age の把握には ICD, ICF も適用できるが、ICHI コードの適用が最も多いと結論づけていた。

2019 年 10 月 10 日(木)9:30~11:00 Official Opening: Information meets informatics (Jacob)

医療情報の現在のあり方と活用について、出生に関する情報を用いた概説があった。また、医療情報の今後について AI などの可能性についても言及し、WHO としての活動についても概説された。WHO としては、WHO-FIC および協力センターは国際的な医療情報の整備における主要なアクターのひとつとして活動することを期待しているとのことであった。

次に、ICD-11 改訂作業について概説があった。ICD-11 の各種ツールの開発は順調に進んでおり、ICD ブラウザ、Coding Tool、ファウンデーションなどの機能と開発の状況について解説があった。また ICD-API については、ICP-API version2 がリリースされ、subset searching、post-coordination combination results などの機能拡張が行われたとのことであった。特に ICP-API version 2 は post-coordination へのフルアクセスが可能であり、Swagger もサポートしているとのことであった。さらに、Containerized deployment として、local level の deployment が可能になったとのことであった。

2019 年 10 月 10 日(木)11:30~13:00 WHO-FIC Council

(1) CSAC

CSAC の活動のプライオリティとしては、提出された ICD および ICF のプロポーザルのレビューである。CSAC としてのミーティングを 2020 年初頭に予定している。ICF に関しては、FDRG との共同開催の中間会議を開催予定であり、また ICF update への作業支援を行う。ICD に関しては、2020 年は 2 月と 5 月にプロポーザルのレビューを、2020 年 7 月と 9 月にレビュー結果の投票を行う予定である。また ICD 関連文書の更新も計画している。

(2) EIC

EIC として新たにウェブサイトを立ち上げ、また既存事業の見直しを実施した。ICD-FiT の開発や ICD-11 electronic education tool の開発を実施したほか、ICD 翻訳ツールの実装に向けた開発を完了させた。また教育用のマテリアルの開発にも着手しており、IFHIMA and WHO の共同での教育用マテリアルを開発する予定である。

(3) FDC

ICHI の完成に向けた ICHI beta 3 version の構築を実施している。また、コンテンツモデルの構築も並行して実施している。プライマリケア分類については、ICPC-3 の開発を WONCA と共同で実施しているほか、UHC や SDG に用いられる各種指標のモニタリングへの活用についても取り組んでいる。さらに、分類用語の基準についても議論している。中間会議 (midyear) は南アフリカかロシアで 4~5 月に開催予定である。

(4) FDRG

現在 ICF の改訂に取り組んでおり、ICF2020 として、次回のタイでの WHO-FIC 会議で発表する予定である。また EIC と共同で ICD-11 V 章の開発に取り組んでいるほか、WHODAS トレーニングツールの開発や、WHO KIDDAS の開発にも取り組んでいる。また、ICF に関する FDRG のフォーラムを開催予定である。中間会議は、3 月にブラジルかロシアで開催予定である。

(5) ITC

ITC としては、ICD-11 browser、ICD-API second version、ICD-11 coding tool などの開発とアップデートを実施した。また、マッピングに関するレポート (white paper) は最終段階まで来ている。さらに、ICD と ICF、ICHI のハーモナイゼーションについても検討しているほか、分類システムのマッピングに関する IT フレームワークについても検討している。また、iCOS (ICD clinical OMICS)についても検討している。

(6) MbRG

MbRG としては、優先順位の高い 7 つのアイテムについてレビューを実施した。また、reference guide や ICHI mapping など様々な議論を実施した。さらに、V-Chapters やプライマリケアについてのプロポーザルを作成した。中間会議は、シカゴかキャンベラで 2020 年 3 月に開催予定である。

(7) MRG

ICD-11 に対して、Mortality のコーディングルールの適用についてアドバイスをを行ったほか、ICD の国内・国際統計での活用について検討を実施した。中間会議は、4月にパリで開催予定である。

(8) MSAC

ICD に関するプロポーザルが多数届いており、レビューをよりシステマティックに実施する必要があるため、レビューと結果を表示するためのテンプレートを開発した。また、ファウンデーションの short description の作成について、MSAC で実施するかどうか議論が必要である。さらに、解剖学の分類についても ICD に導入すべきかどうか議論を行っている。ファウンデーションのアップデートについては、より多くの情報を入れるべきであり、human phenotype ontology (HPO) や Monarch disease ontology (MONDO) などについても検討を行っている。

(9) TMRG

TMRG としての今後の活動について議論を行い、また ICD-FiT を踏まえて TM 章や ICD-11 の他の章のコーディングの実用性について検討したところである。また ICD-APIs を活用して TM 章の翻訳も進めたいと考えているほか、教育のために ICD-11 e-learning tool のレビューを行った。さらに、TM 章の実用化のためのパイロットでの利用を推進し、コーディングのガイドラインを作成しているほか、TM 章に関するレビューも実施している。TMRG としては ICHI とのディスカッションを行っているほか、TM に関連した他のモジュールの開発についてもサポートする予定である。

2019年10月10日(木)14:00~15:30 ICD-11 round table

ICD-11 の実用化に向けた各種作業を実施している。具体的には、ICD-10 と ICD-11 の死亡に関する Transcoding を試行した。また、ICD-11 の各国適用については、各国での進展に期待している。例えば、ドイツでは MMS の翻訳が 2019 年中に完成する予定であり、ファウンデーション全体の翻訳も 2020 年末までに完成予定である。

2019年10月11日(金)午前

次年度の WHO-FIC 年次会議は、2020年10月19~24日、タイ・バンコクで開催予定である。

以上

